■鹿内信隆 “メディアの帝王”。一介の会社員から、階段を駆け上がるように、フジサンケイグループ総帥になった。

しかないのぶたか

大逆事件判決1911＝

北海道夕張郡由仁町で、鹿内徹・モヨの長男に生まれる。のちに、第3人、妹2人ができる。

明治天皇没・1912＝1歳：

小学校も終わっていない父は留萌町で写真館営んでいたが、一念発起して歯科医になり、由仁町に移ってからは、母が歯科医院に併設する写真館を運営、昭和初期には、陸軍大演習のため由仁町を訪れた昭和天皇を撮影するなど、女写真技師の草分けともいえる。

大暴落・・・1920＝9歳：

原敬首相暗殺1921＝10歳：

護憲三派圧勝1924＝13歳：

岩見沢中学に入学、弁論部に入って主将を務めたが、小生意気な子供であったという。父は、昭和初期に、怪しげな“鹿内教”に熱中するなど、山師的で、周囲から“変わった一家”とみられ、母が事あるごとに借金しようとしてもできなかったともいう。一方、6人兄弟全員が東京の大学に入ることから、資金的な面倒をみる別の親がいたのではと考えざるを得ない面もある。

世界恐慌・・・1929＝18歳：

単身上京し、早稲田第一高等学院に入学。後に社会派の映画監督となる山本薩夫らと、演劇に熱中、

満州事変・・・1931＝20歳：

五一五事件・1932＝21歳：

早稲田大学政経学部に進学、財政学を専攻し、研究サークル{政経研究会}に所属。“図書館ゴロ”と渾名されるほど、真面目な学生に変身、のちに経営に参加してもらう学友も多くなる。

帝人疑獄事件1934＝23歳：

“帝人事件”で、世話になった同郷の大蔵省官僚が逮捕されたことから、無罪を証明する材料を集めるべく、**財界総本山の一つ{日本工業倶楽部}に入り、のちの飛躍の原点となる。**

二二六事件・1936＝25歳：

卒業。教授で{東京日日新聞}の副主筆も務めていた阿部賢一の斡旋で{倉敷組}に入社、終生師事することになる。同社専務で事実上の社長を務めていた菊池寅七に預けられ、四国の工場に配属され、

日中戦争始・1937＝26歳：

健保+総動員 1938＝27歳：

第二次大戦始1939＝28歳：

軍需対応で新設の{三徳工業}に転籍、辞めたいと思う間もなく、応召し、札幌歩兵第25連隊に配属直後、新設された大卒者の幹部候補生となって陸軍経理学校に進み、一旦原隊に戻るも、居残り組で戦地に出ずに再入校、**陸大出身者と一緒の監督官養成コースに乗るという幸運で、決定的な一歩を踏み出す。**

日米開戦・・・1941＝30歳：

・・・・・・1942＝31歳：

創価学会検挙1943＝32歳：

敗戦・・・1945＝34歳：

新憲法公布・1946＝35歳：

阿部賢一の勧めで、菊池寅七の次女英子と結婚。主計少尉となり、**異例の抜擢で、陸軍省軍務局戦備課に配属、日清紡の営業部長で軍と折衝していた桜田武や大日本再生紙社長の水野成夫らと知り合い、**
国有民営方式の軍需工場設置を担当、水野と南喜一を支援して{大日本再生製紙}を設立。
主計中尉を最後に除隊。国策会社{日本電子工業}の創立に参加し、取締役企画部長に就任。
長男春雄が誕生。福島県郡山市に疎開中に敗戦、東京に戻って、今後の生活を思索するうち、
{日本電子工業}のトップが公職追放となり、常務に昇格、***経済同友会創設に参画、設立総会で司会を務め、その若さで目立つ存在に。関東経営者協会の発足で、桜田委員長の手引きで、副委員長から、**

新憲法施行・1947＝36歳：

極東裁判判決・1948＝37歳：

三大事件・・・1949＝38歳：

常務理事になり、公職追放になった経団連事務局長植村甲午郎から指南も受け、日本経営者団体連盟(日経連)設立で、桜田から引き抜かれるも、事務局から無視され、第二事務局たる弘報部で委員長に水野を置いて人脈固め、週刊{日経連タイムス}を発刊。

独立回復・・・1951＝40歳：

メーダ事件・1952＝41歳：

TV放送始・・・1953＝42歳：

自衛隊発足・1954＝43歳：

弘報部直属の印刷会社{日本製版}を設立し、社長を兼任、争議を控えた会社の文書を印刷する秘密工場の役割を担い、政財界の舞台裏を取り仕切る一方、のちのメディア進出への中核部隊が形成されて行く。
民放ラジオ放送がスタート、{ラジオ東京}{文化放送}に対し、**新興財界人を中心に放送局設立をめざし、電波監理局に申請するも、既存2局の抵抗で免許がおりずいたが、**
この年、{NHKテレビ}{日本テレビ}が開局。**追放解除になった植村甲午郎が代表となって一気に進展、**
***{ニッポン放送}設立に加わるや、かつて仲間たちを集めて管理部門を握り、メディア支配に足掛かり。ボクシング日本初の世界チャンピオン白井義男のタイトルマッチの独占中継で認められ、驚異的躍進、**

国連加盟・・・1956＝45歳：

なべ底不況・1957＝46歳：

美智子妃・・・1959＝48歳：

早くも、NHK含む東京局の聴取率トップになる。本命たるテレビ開局に向けて、欧米の事情を視察、
{文化放送}にいた水野と協力、3大映画会社を巻き込み、
{ニッポン放送}が筆頭株主になるよう画策して、{フジテレビ}を開局。皇太子成婚中継で唯一社、馬車への投石事件を捉える幸運にも恵まれ、後発ながら、全日放送一番乗りを果たし、

安保闘争・・・1960＝49歳：

タイタイ病始・1961＝50歳：

全国総合計画1962＝51歳：

東京村ビルック 1964＝53歳：

大学紛争始・1965＝54歳：

いざなぎ景気1966＝55歳：

衰退する映画会社と激突するも勝利は動かず、**利益率でトップになって、{ニッポン放送}社長に就任、**
{産経新聞}社長だった水野の要請で、その副社長に就任、3大メディア最後の新聞にまで足掛かり、
水野との確執で{産経新聞}副社長を辞任、引き換えに、水野が会長に退いた{フジテレビ}社長になる。

震ヶ関ビル・1968＝57歳：

全共闘・・・1969＝58歳：

大阪万博・・・1970＝59歳：

トルショック・・・1971＝60歳：

{フジテレビ}で組合結成の動きが生じるや、画策して潰すが、現場の士気は低下、視聴率低迷へ。
この間、**水野の道楽的経営によって、{産経新聞}の累積損失が拡大、**
***脳溢血で倒れた水野から奪い取るように、{産経新聞}社長に就任。3大メディア全てを掌握する初の経営者に至ると、{フジサンケイグループ会議}に統合、他に例を見ない議長で支配を固め、かつての反共の顔を消し、すでに温めていた構想を実現すべく、箱根で“彫刻の殿堂”づくりに着手、**
{彫刻の森美術館}が開館すると大成功、美術館館長の肩書で、欧米の要人とのコンタクトが可能になり、
春雄が{ニッポン放送}に入社。この間、田中角栄のものとの郵政事務次官浅野賢澄の意向に沿って“U波解放”を推進し、全国ネットワークでテレビ界トップになる。

石油ショック1973＝62歳：

角栄金脈辞任1974＝63歳：

JALハジャック・1977＝66歳：

革新大敗北・1979＝68歳：

高松宮が総裁を務める日本美術協会が経営危機に陥って救済を求められ、{上野の森美術館}として再生、皇室にもつながり、日本の顔の一人になって行く。以後、箱根で過すことが多くなり、
門外不出とされたモナリザ展開催に成功。全ての社長を辞職して、会長に退くものの、
{サンケイ}での「蒋介石秘録」連載により、台湾から最高勲章。
{彫刻の森美術館}への天皇行幸が実現。{フジテレビ}の視聴率が低迷してきたため、前年に植村甲午郎が死去していたことから、植村2世を放逐。自ら指揮をとり、長男春雄を中心に体制を一新、
視聴率トップを回復、以後、13年その座を守る。{美ヶ原高原美術館}を開館。
“レフチェンコ事件”のスパイ当事者とされる危機も乗り越える。勲一等瑞宝章。

・・・・・・1981＝70歳：

中曽根内閣・1982＝71歳：

テイムレポート・1983＝72歳：

ジャンク機墜落1985＝74歳：

「いま明かす戦後秘史」、桜田武と共著「21世紀を拓く」。アメリカ大統領レーガンと独占会見を実現、
「指導者 カリスマの秘密」。フジサンケイグループ議長を長男春雄に譲って最高顧問の座に退いた後も、春雄の進めるお台場プロジェクトのサポートなどしていたが、

バブル始・・・1986＝75歳：

竹下登内閣・1987＝76歳：

リクルート事件・1988＝77歳：

昭和天皇没・1989＝78歳：

「鹿内信隆は語る―理想なきものに創造性は生まれぬ」(泥まみれの自画像)、
高松宮が死去すると、日本美術協会創立百周年を大義に、文化面での国際賞の創設を構想、欧米の要人を精力的に訪問、親台派のため中国・アジアを対象から除外することに疑問を呈される。
インペリアルを冠することを狙うも、昭和天皇の認知得られないうち、長男春雄が急死。再びグループ会議議長となり、女婿で興銀社員だった佐藤宏明をグループの後継者に定めたが、体調異変で入院、
「創造の感動に生きる」。*実現した世界文化賞の第一回授賞式に欧州の元首が参列して貰うのに合わせて、巨費を投じて、大統領を退いたばかりのレーガンを招待し、{産経新聞}で大特集したのを花道に、鹿内姓となった宏明を正式に議長、各社会長に就任させた後、

トイ統一・・・1990＝79歳：

膵臓癌で、没した。

中川一徳「メディアの支配者」、インターネットWikipedia、